





2 浅
三十九頁
二股丸
9. 6
パ
ウ
に
い

浅瀬の亂れ

自己中心明治文壇史

江見水蔭

狙って當らぬ

明治二十二年後期

著百種
当時の文壇登龍門は、何んと云つたか
著百種
で有つた。自分としては何んとか
て一篇を受持するが、(一)同誌は一篇一作を

帰途の雪で食事をして、徒歩で向島へ廻
 りふらぐらぐら、決して北條は可いふらん。
 同月二十五日。石橋思案を誘ひて、碓氷
 峠の横手新聞の霧積温泉へ旅行をする
 事。この時、練馬町へお伴を誘ひ
 る事。初め、京都停車場で兄、高橋の士
 露伴其人で有らんを知らん。
 十一月一日、房州へ旅行して、北條と十
 日ばかり滞在在中、巖谷が遊びに来ん。其時
 君を喜びやる物を持つて来ん。とつて、
 何かと思つたら、それは小説無盡蔵の出
 版で、その第一巻は自分の白紙の葉を
 みるのを有らん。但し、巖谷は小説の匿名で
 有らん。巖谷は巖谷川筋町と云ふ匿名を用ゐ
 て、文庫にふん書いてるらん。その
 譯は、それは、巖谷落し合むらん。あぶと
 思ふ。
 二人で鏡ヶ浦の遊を散歩した。巖谷
 は間もなくその背景として小説を発表し
 自分も亦巖谷の影を一人、外房州を廻つ

後方の方と

No.

A 10 20 書 三 阿 羅 漢 塔

同月二十五日。石橋思案を誘ひて、碓氷
 峠の横手新聞の霧積温泉へ旅行をする
 事。この時、練馬町へお伴を誘ひ
 る事。初め、京都停車場で兄、高橋の士
 露伴其人で有らんを知らん。
 十一月一日、房州へ旅行して、北條と十
 日ばかり滞在在中、巖谷が遊びに来ん。其時
 君を喜びやる物を持つて来ん。とつて、
 何かと思つたら、それは小説無盡蔵の出
 版で、その第一巻は自分の白紙の葉を
 みるのを有らん。但し、巖谷は小説の匿名で
 有らん。巖谷は巖谷川筋町と云ふ匿名を用ゐ
 て、文庫にふん書いてるらん。その
 譯は、それは、巖谷落し合むらん。あぶと
 思ふ。
 二人で鏡ヶ浦の遊を散歩した。巖谷
 は間もなくその背景として小説を発表し
 自分も亦巖谷の影を一人、外房州を廻つ

7 浅

受ける
 芝居も今の儘では様が無い。海劇改良は
 笑話ばかり金せては置けあい。世間で我
 らも舞台は立つとして、併し、最初から園十
 郎や藤五郎以上の成れる男を求めたい。だが
 去人の演ぶものも、物も手も着けあけられず損
 びの型の有る物は、趣味も遊ばず。上
 然るは、ふり、
 徳力を書を——完全な
 文士とは云ひ切れぬ。——
 大仕事

何を向うか
 我々の身は、
 劇改良の
 ためのは、

No.

て、其時、得た材料で、
 いて、尾崎の頼んで、讀ませ、
 は原稿料は取らなかつた。
 十二月十五日、尾崎を訪ふと、
 今度芝居をする。無語君も替成り、
 脚本を是非書いてもらへ。
 寧ろ、年末の掛分、
 何処か原稿を賣つて貰ひたい。彼の腹で有つたの
 が、然るはふくて、素人芝居の脚本を書か
 せ、
 失敗は、
 嫌ひで、
 引

A 10 20
 青心三郎
 徳田秋声

減

元祖とて、然るに、
 心は、清く、
 けれども、一口は、
 分有る者が、
 の他は、
 自らが、
 の勇猛心は、
 いふが、
 硯友社中は、
 薫（故法学士、
 辨護士、
 海辺輝之助、
 佐倉

No.

知れ、
 つれ事は、
 彼の二人が、
 の家の、
 芝居を、
 の多かつ、
 道楽、
 の會、
 の、
 敢て、
 文士、
 野

A 10 20 書 川

9 浅

作で、後名は自作の題號を女傳といふの心有
 又は三人多し、~~新編~~新編總出。ツラネは鏡を自
 大切は、花鏡ル才子といふので、五人男
 討つと、その筋。その他を四幕は書上げん。
 城考を著し、左衛門の遺子宗虎が、盆踊の夜に
 自分脚色、積怨恨切子燈籠、九州の鶴造寺山
 津川の戦死を二場。二番目は、廣津柳屋立案、
 佐増補右平記、大塔宮吉野落、片岡八郎十
 行割、~~後不足~~ふりて中止、さうして、一番目は自分の創
 大のハッ房、ある石橋が、
 思案
 No.

の人、~~後不足~~といふ脚本家がある、二三の戯曲
 を發表して居り。又、文庫に成つており、
 漢山人(多田寛)が有る、
 積雪、~~節~~松、~~枝~~
 を發表してある。この二先輩が在る、
 尾崎の自分、~~後不足~~を現存の立作者は、
 尾崎、~~後不足~~に就て、自分は
 最新、~~後不足~~八犬傳の富山の陪を、常磐津の
 旧作は據らず、馬琴の名文章を發揮する様
 又、新編の書卸せといふ、~~後不足~~論文を發したの心覺束
 一冊纏めて、伏姫を幕巻、大助を自分といふ
 A 10 20 善山 三國屋新設類

浅

幕臣(出のまゝ) 催さるる事と成つた。それは
 同氏の長男(正義)が、黄鶴と號し、(旧)硯友社員の一人
 有つて、常に同人が出入してゐる關係で有つ
 る。
 舞臺は、(山の守)有数の庭園を占領して新築さ
 れた。その木材は小学校の建築用のを一時流
 用したので、その釘を一切用ゐないのが
 條件であり、柱は切組の繩体は不可能な爲
 め、花道を舞台と並行し、(能舞台の橋掛り式
 を)改め、より他は無いたので有つた。

No.

紀事は其の語を略し、あつた。代運く富士見町
 の桂舟の花や、候る時、鐘りの亭中が成つて
 る。今の、今の陸軍と醫學校の在る所の、少
 し曲り、岸を成つてゐる。昔へ、(山)、(山)、(山)
 を掘り、利いれといふ滑管も有つた。
 文士劇(の由来)
 明治三十三年の春
 山
 いよいよ一月五日、文士劇は小石川水道町
 の佐藤正興邸で、(小石川区長が)東京市助役も成つた人

A 10 20 第三編 第三卷 第三編 第三卷

心 浅

庵が忍緒しんといふ、それは国民之友の
露伴の匿名で、文壇逸話として書かれた筈だ。
(因に鈍す——文壇逸話の表は恐らく是の最神の
物があるもの。)

一番目 増補平筆の主要な後割は

大塔宮 川上眉山(澤村眉壽山)

玉置半九郎 巖谷 陣(澤村連之助)

野長瀬六郎 江見水蔭(尾上江見蔭)

野長瀬七郎 岡田虚心(中村虚心)

内田八郎 石橋思素(市川思素次)

No.

見物は三百餘名。其中より依田学海、森槐
内、野口寧齋、石橋思月、内田不知庵、さん
を連中がある。
社中で登場しおいは、柳浪、乙羽、三唾、
それら桂舟で有つた。(桂舟は北丹景や衣笠に
就て徹夜まで盡かした。)
この時で有つた。見物の中は柳浪夫人(和
郎の室母で、ちの十子と云つた。)がある
とも知らず。不知庵が高声で、
の批評を他試み。後でソレと合して不知
著 残菊

A 10 20 巻 三河原野記

17 浅

見識を有してある様だが、今は佐藤家から、
 豊島焼魚を作るに困るから、喫煙室は別
 に設けると云ひ出されたので、正しを得ず実
 行しぬので有らん。
 この芝居の大團圓が、振るるん。それ
 は打出して間もなく、樂屋に於て、市が大百襲
 を服かぬ紅巻が、刀の折れぬのを、前へ
 ムキ子成るを諱どてゐるのを、如何しぬのが
 と聴いて見ると、立廻りの時を折つた道具
 の刀の陪償金を就てふり、薙髪を真けえふ。

No.

てゐるといふ、聴いた時は、益々悲哀と
 嘆息を感ず、同時に、登壇の心は、奮然と
 して、下りぬので有らん。
 (学海翁の劇評の中より、自分の名をけね流
 して有らん)
 茲に是非断つて置かざれば成るぬのは、
 今の文士劇の如く、決して會堂でんか取らぬか
 らん。知人を招待して、茶菓作は(不行條り
 は免ぬが)是れので有らん。それと禁喫
 煙を實行しぬのも亦我等の慰で(ト云ふと一

A 10 20 青い 日記帳

つれので有つん。

志年の暮は大学の英語會で、英譯の忠臣

病を満じなると、大学生が芝居をする。さん

て怪しむると、話を聞いて政變を直

ふ。後方のいかり、これは其時代とては當

然問題ふり有つん。

けん、杉浦先生は若菜禮二人は別だ

よ。こんふ、輕い指で済んで、別に自分を見

生かすか小言も頂かたかつん。

それと同様に、然る程の厄村も成つてゐ

No.

と龍頭市川紅十郎大眼玉と判いてあるのを有

つん。

妻が又け刺後、巖谷と自分との身の上、

一問題が持上つん。それは龍頭の山田新

一郎（前鳥取縣知事、現北野神社官司）の、未

だ大学法學部へ通つてゐる頃で、この

おどが主と成つて。

巖谷と巖谷や江見の怪しむと。杉浦の純

なる者が、芝居を演じては何事だ。とい

ふので、悪くすると（龍頭を命どらるる）成

A 10 20 巻の 川島龍頭記

20 減

東多朝の出入りとは自然のありか成る
 ので、それで一寸空入り小説とスネツと酒
 ので有る。けいれい録り等らふの
 一方、読書は阿進堂
 加つて、杉浦先生は既に阿進堂
 真田早苗先生が正式に入社し、中井鉢城が

No.

入り、茅野へ出る旅行を材料として、梅本堂
 といふのを書いて、金港堂編輯員へ持て行
 った。(櫻月と持てんが、小説業の
 都の社の主筆は書事中根淑先生にけいれい、
 寄稿は總べて藤陰が取つてゐる。(美妙は縁の
 一人で、以後能く世話する。藤陰は自分を取つては思人の
 この時代には、曾村は読書に服して、東
 京朝日に入社、社めて字入り小説といふの

A 10 20 香山 川崎版紙日記

双葉

ういふ話と例の二宮が聴いた事がある。
 新著百種は八篇まで出ている。
 この時代は村南翠の対抗。新進級では
 何んと言つても紅葉露伴といふ処で有る。
 その美は美妙。胡蝶の裸体問題がある。
 忍月の露子娘の美は本が出た。
 二人は既に下火で有る。
 紅葉と露伴とは別々。西鶴の研究者で
 有る。図書館へ行つて西鶴本を借り出す問
 題を知り合ひ、ある日西鶴本を借り出す問
 題を知り合ひ、ある日西鶴本を借り出す問

No.

たりで、雨戸の表には安藤屋が附着して長く
 落ちずある。

尾崎紅葉の父

明治二十三年の花柳界の時

この時代の読書は、西外史の名で玉
 を抱いて罪有りといふ探偵小説の雑誌が連
 載された。それは醫學士で、本誌といふ軍醫で
 原稿を書くのが流れる様も早い。社より催促
 へ行つた。待たせて置いて急に書上げた。然

A 10 20 書正 三原新太郎

浅水

行つてゐる。)
 句 イヤ何と聴かぬ。と親友は云つた。
 句 さうだね。それ川上。怒りのはあつた。
 句 思ふんぬかね。X X。川上は向つて、尾崎の
 親父は替間の谷藤と云つた。川上は、
 十ニまんぶ事は無い。親友の借金が知り多い
 のが何よりの証據だ。云つた。X Xは冷
 笑する様だ。それは尾崎が居る。隠してゐる
 句 何て... ねえ、君、あの赤羽織の谷藤が、
 何んで君の親爺さんか。それは象牙彫りで

No.

がX Xと云ひ合つたといふ話だが、君は知つ
 てゐるね。と自分は問うた。
 翁と云ふのは、薬劑師で、安川政次郎と云
 い、旧硯友社員で、表神保町に化粧品のお店を
 出し、花の雲と云、花の蔭と云、ボマト
 ン、X X、或はオコキ、ナといふ化粧品を
 造り、且つ賣掛いてゐる。時代の早過ぎる
 ので去則して、今あるのは大勢を賣けてゐ
 るのである。其引札や廣告文を、皆尾崎
 の書いた。その()に所へは能く社中の様子は

A 10 20 第三回 浅水

浅

は名人の知り知れぬいかに、芝居のうまい、相撲のうまい
 齋の悪口を云つたので有つた。
 駒馬もなほ不で、一度斯う口をきかせるのは
 如何の事取返さぬか、ゆめゆめで有つた。その日は
 事案で有るのを不ツと後日自分には知つた。記
 事結婚間もなく、横寺町の宅を祝して行き
 掛つて自分より一足先なる齋の懐深く隠れ
 るのが無心さんを見て、初めを覚つたふど
 は血のめぐり、確の要のつんが併しそ
 れにけ又秘密の事を見るので有つた。
 然るに譯で、其時で記事は齋に就て
 口外せず、他の雑誌の行つた。
 や、君と斯うして交際するもの、明心の時代
 の難有さだ。昔より君は備前中津の何の何某
 の若様さんだ。僕は平良さんだからね。
 然るに云つた時の記書の題は陰影が有つた。
 それで君は自分も覚ふふのつた。女上
 又珍らしく食事を出さぬ。晩餐の時馳走
 が出た。君は事案は其當時寂多無心事

No.

は名人の知り知れぬいかに、芝居のうまい、相撲のうまい
 齋の悪口を云つたので有つた。
 駒馬もなほ不で、一度斯う口をきかせるのは
 如何の事取返さぬか、ゆめゆめで有つた。その日は
 事案で有るのを不ツと後日自分には知つた。記
 事結婚間もなく、横寺町の宅を祝して行き
 掛つて自分より一足先なる齋の懐深く隠れ
 るのが無心さんを見て、初めを覚つたふど
 は血のめぐり、確の要のつんが併しそ

A 10 20 青い 川原野 新刊 昭和 20 年

27 浅

幼少して
 元の法醫で有つて、其息即ち紅梅の叔父子
 であるが、荒木宗平と云ふ、~~現は北町の~~
 標札は荒木と鹿嶋と両方記されて有つた。
 宗平と云ふのは、電信技手で、世傳ハ王子の
 勤務してゐた。先づそれ位は誰ぞも知つてゐ
 るのだが、親友である眉山、白石、全く岩崎
 の子とは知らなかつた。(桂舟、白石と同様
 の失言が有つたと云ふ)
 尚、当然に紅梅の結婚の噂は、親友側

No.

方の。
 自分も何の知らなかつた。~~持て感~~。外は
 降つてゐる。後で考へて見ると、市橋を
 出たお祖母さんの顔より、確り陰影は
 んでゐた。(けつを事、~~今更~~の如く冷汗
~~を流した~~)
 紅梅の家は当時疑問で有つた。好々爺型
 老人と、若い頃の美人と、かつて老女と、
 三つがけの家で有つた。二人は祖父祖母の
 関係で、実母は早く~~他界~~したので、紅梅は

A 10 20 書 川 徳記

明治二十三年の如く年中ノベツトは無
 博覧會、そのは今の如く年中ノベツトは無
 いので有つた。此の第三内國博覧會博覧
 會？そのは、二十三年國會開始と共に 京都の春を二層 眺むる事な成つ
 るので有つた。

明治二十三年の如く年中ノベツトは無
 博覧會、そのは今の如く年中ノベツトは無
 いので有つた。此の第三内國博覧會博覧
 會？そのは、二十三年國會開始と共に 京都の春を二層 眺むる事な成つ
 るので有つた。

彈正美入への恋
 明治二十三年の春より初夏へ

へ一應披露の有る筈、それを遊げん。又谷
 齋の35ん、無論知りては易い事な成つた。
 何れそんな隠す必要は無くないで、谷齋
 は彫刻家として、確かに明治維新の天才でも
 あり、其期間的に行き、奇人傳中の一人と
 見るべき迄話さるる。何んの恥ぢる
 処が無いのぢやんと、どういふのが紅葉は
 秘し隠し、隠し通して有つた。
 それ、併し時代思想を等置せずなるもの
 らす。階級的全盛期。赤い民衆運動の起る

各新聞では各部門に分けて、各専門家の
 一、其批評を掲載するに熱中しん。其中で
 読者の口は、新機軸を出すに急ぐが、博覧會
 餘所の記述といふ一欄を設けて、出品以外
 今、今の雑誌——博覧會スケッチ——を掲載
 すべく大々的預告をし、其執筆者として、坪
 内逍遙、尾崎紅葉、幸田露伴を發表しん。
 此時、市が美術展覧會が無かつたの
 で、この博覧會の出品の資格を得、各美術家
 は光榮しん。(今の様は美術家が無かつた
 展覧會のふいふ) 三松折展風の
 福徳庵(百穂のふ)の虎が、大勢で又
 傳作として、評判で有つた。久保田米僊の
 猫と茶の花の尺五折り、新らしい畫として、秋
 葉の遠景を意ひん。
 市に他の名家の出品しちのむを、自分
 の記憶は、日本畫に於て正に二点の留つた。
 それらの彫刻として、神武天皇の甲神影?
 高村光雲が、見上げる様ふ大木像の彫作し
 るが、市が目に入つてゐる。(今現は美術学校

No.

A 10 20 浅山 三松折展風の

各新聞では各部門に分けて、各専門家の
 一、其批評を掲載するに熱中しん。其中で
 読者の口は、新機軸を出すに急ぐが、博覧會
 餘所の記述といふ一欄を設けて、出品以外
 今、今の雑誌——博覧會スケッチ——を掲載
 すべく大々的預告をし、其執筆者として、坪
 内逍遙、尾崎紅葉、幸田露伴を發表しん。
 此時、市が美術展覧會が無かつたの
 で、この博覧會の出品の資格を得、各美術家
 は光榮しん。(今の様は美術家が無かつた
 展覧會のふいふ) 三松折展風の
 福徳庵(百穂のふ)の虎が、大勢で又
 傳作として、評判で有つた。久保田米僊の
 猫と茶の花の尺五折り、新らしい畫として、秋
 葉の遠景を意ひん。
 市に他の名家の出品しちのむを、自分
 の記憶は、日本畫に於て正に二点の留つた。
 それらの彫刻として、神武天皇の甲神影?
 高村光雲が、見上げる様ふ大木像の彫作し
 るが、市が目に入つてゐる。(今現は美術学校

廿一
段 6

いれ。それら。

~~油畫の女人は脱け。~~

○油畫の女人は脱け。

美人彈琴の太油畫のあゝ、春道心一人石の如く
ありて動がず、深く感ずる。や晴々首を掉る後
姿、何処やら先見えありと、さう寄り寄る楳嶺
を見れば、ほ見れ隆きり。物をおツヤれく
とつぶやくを、肩を拍ツて、和尚什麼是畫表
美形といへば、若高とを牡丹日記。滿城公子
醉。穿々女の顔の肉つき、傳粉の具合は、宛

No.

あ保存さるる等)

傳畫としては、今の現代とは隔世の感がある
りて有つれ。中々古代事士が大地の口へ身を
掛けて引裂くのが有つれ。馬場田若柳の作で
これがか人目を惹いた。

それら、亀井至一の美人彈琴の圖が大
評判で、俗衆は以前も、常々群を作してゐた。
自分もその讚美者の一人で、入場毎に其前
~~それら~~ 讀書の餘所の記中事

A 10 20 善心 三四回 新編 巻

書の名で 講要 へ 梅本竹豆 と題し

俳文詞で 一れ 眉山の玄雪の

名で ~~...~~ そのと 傳の 又

馬の名で 又 是れ へ

~~...~~ 其の 名で

~~...~~ 送る 名で

知つてが 知る ずの 煙亭

山人で 東京新誌 名で 煙亭系

の文士 ありて 有らん 中村 柳園 譲らん

この 眉山 へ 堀成之 と ヤモメ

台を 本郷 森川町 試する 塚

移る 有らん 硯 支那の 全盛期



